慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	最近における物価史研究の動向
Sub Title	Recent tendency in the study of price history
Author	渡邊, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.1 (1957. 1) ,p.53(53)- 58(58)
JaLC DOI	10.14991/001.19570101-0053
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570101-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トはエリー運河豫定地沿いの土地の大部分を保留し、退職する迄保留狀態においた。更に他の地域でも同じ頃大規模な保留をしていた事は明かである。Evans, Op. cit., pp. 254-255.

(8) 彼はこの點を特に力說している。Ellicott Reports, I. pp. 381-384.

(9) 一七九八年、一八〇二年の試みは失敗している。一八一九年の場合は、會社側が不在地主への高額課稅法案と、オランダ人地主への次第に昂まる敵意に脅かされた爲であるが、其れを支持したクリントン派はそれから「政治資本」"political capital" を引出そうとした。右の詳しい事情は Evans, Op. cit., pp. 269-274. 及び Chap. IX. 參照。

（一九五六・一一・九）

三田學會雜誌

第四十九卷　第十二號　目次

論　說

國鐵運賃についての一考察……増井健一

科學的管理法の總體的考察……野口祐

經營政策論の展開への一試論……關口操

黎明期のイギリス勞働組合運動……飯田鼎

資　料

マルク・ブロックと歷史……渡邊國廣

書評及び紹介

D. Hamberg, Economic Growth and Instability……鈴木諒一

武藤光朗著『經濟倫理』……氣賀健三

ヤコフツェフスキー著 石川郁男譯『封建農奴制ロシヤにおける商人資本』……常盤政治

經濟學關係文獻目錄

資料

最近における物價史研究の動向

渡邊國廣

一

今世紀に入つての物價史研究の隆盛は、第一次大戰中と戰後のインフレで物價に對する關心が高まつたことに起因した。カーネギー財團による大戰史では物價事情が重視され、Bowley, L. Prices and Wages in the United Kingdom 1914-1920, London 1920 と、March, L. Mouvement des prix et des salaires pendant la guerre, Paris 1922 の二著が特に加えられた。他方で物價史の方法に對する理論的反省もあり、例えば Layton, W. & Crowther, G. An Introduction to the Study of Prices, 2nd. edition, London 1935; Febvre, L. "Le problème historique des prix," *Annales d'hist. économique et sociale*, 2 (1930) が目立つた。そして、物價史に對するこのような關心の高まりは、ハーバードの學者 Gay, E. の提唱で、物價史研究のための國際的協力の必要から、International Scientific Committee on Price History が組織されるに及んで最高潮に達した。その第一回會合は一九三〇年五月に開かれ、アメリカについては主唱者の Gay が、フランス、イギリス、ドイツ、オーストリア、オランダについてはそれぞれ Hauser, H., Beveridge, W. H., Elsas, J. M., Pribram, A. F., Posthumus, N. W. が中心に研究を進めることを決定した。議長は Beveridge であつた。またポーランドで早くから物價の研究に從つた Bujak, Fr. や、スペインの物價に深い知識を持つ Hamilton, E. J. が討議に加わり、委員として各自の專攻で研究を指導するよう委囑された。委員の手でそれぞれ物價史の研究が進められ、相當の成果を擧げつつある。既にその一部は纒められ、ドイツについて Elsas の Umriss einer Geschichte der Preise und Löhne in Deutschland I. Leiden 1936, II.A 1940, II.B 1949 (Wagemann, E. Wholesale Prices in Germany from 1792 to 1934 Berlin 1935 はその前驅的研究)、オーストリアについて Pribram の Materialien zur Geschichte der Preise und Löhne in Österreich, I. Wien 1938, フランスについて Hauser の Recherches

et documents sur l'histoire des prix en France de 1500 à 1800, Paris 1936,イギリスについて Beveridge の Prices and Wages in England from the Twelfth to the Nineteenth Century, I. Mercantile Era, London 1939, アメリカについて Bezanson, A., Gray, R. D. & Hussey, M. の Prices in Colonial Pennsylvania, Philadelphia 1935と、同じ著者達による Wholesale Prices in Philadelphia, 1784–1861. 3 vols. Philadelphia 1936–1937, Warren, G. F., Pearson, F. A. & Stoker, H. M. の Wholesale Prices for 213 Years, 1720–1932, New York 1932, Cole, A. H. の Wholesale Commodity Prices in the U. S. 1700–1861, Harvard University Press 1938, オランダについて Posthumus の Nederlandsche Prijsgeschiedenis, I: Goederenprijzen of de Beurs van Amsterdam, 1585–1914; Wisselkoersen te Amsterdam, 1609–1914, Leiden 1943 (Inquiry into the History of Prices in Holland I; Wholesale Prices at the Exchange of Amsterdam, 1585–1914; Rates of Exchange at Amsterdam, 1609–1914, Leiden 1946 はその英譯版）が公刊された。ロックフェラー財團の資金援助もこれに與つて力があつた。ほかに、スペインについて Hamilton の Money, Prices and Wages in Valencia, Aragon and Navarre 1351–1500, Harvard University Press 1936, と American Treasure and the Price Revolution in Spain 1501–1650, Harvard University Press 1934, ポーランドについて物價史の種々な業績が光つた。國際間の緊密な連絡で物價史研究は發展の新たな段階を迎えることが出來た。

從來、例えばイギリス、フランスについてそれぞれ Rogers, T. A History of Agriculture and Prices in England from the Year after the Oxford Parliament 1259 to the Commencement of the Continental War 1793, 1–6, Oxford, 1866–1902; d'Avenel, G. Histoire économique de la propriété, des salaires, des denrées et de tous les prix en général depuis l'an 1200 jusqu'à l'an 1800, 1–6, Paris 1894–1924 があり、ドイツについては、前の二つと較べれば小規模だが纏まりのよい Inama-Sternegg, "Quellen der historischen Preisstatistik, "*Statistischen Monatsschaft* XII, 1886; Wiebe, G. Zur Geschichte der Preisrevolution des 16. und 17. Jahrhunderts, München 1895, ベルギーについては Documents pour servir à l'histoire des prix de 1381–1794, Brüssel 1902, オランダについては Sillem, J. A. Tabellen van marktprijzen van granen in Utrecht in de jarrn 1393 tot 1644, Amsterdam 1901, イタリーについては Magoldi & Fabri "Notizii sui salaie e sui prezzi di alcune derrate alimentari e prodotti industriali nelle citta di Milano, Venezia, Geneva e Firenze nel secoli XIII al XVIII, "*Annali di statistica* 1878 XI, 2; Bartolini, Contribuzione per una storia dei prezzi e salari, Rom 1881 を擧げることが出來る。しかし今世紀に入つての業績は新しい基礎に立つての研究であつた。その意味で十九世紀以來の諸業績と區別されねばならない。主たる相違は、何よりも地域的研究を重視し、國全體の物價を考えず、むしろ各地における物價を問題とする點、また物價の「高騰」とか「下落」といつた一般的表現を用いず、數字で示している點であつた。全般的に研究を進めた場合に起り易い危險を避けるため、狹い地域について詳細な研究を積上げようという精神であつた。しかし地域的研究に徹底したため、「庭園の氣象學」のそしりを受ける危險を十分に孕んでいた。

ともあれ、物價史研究におけるかかる態度は、これより早くポーランドで芽生えていた。國際協力のための委員として會議で參考意見を述べたこともあつたレンベルグ大學の Bujak を中心に、この國では物價史の研究が華々しく進められていた。地域的研究と統計處理を重視する點で正に物價史研究の先驅國であつた。特に一九二八年以來物價史研究はポーランドにおいて經濟史研究の主要な課題となつた。この國の經濟史研究の叢書 *Badania z dziejów spotecznych i gospodarczych*（社會經濟史研究）には物價史の業績が目立つ。例えば Hoszowski, S. Ceny w Lwowie w XVI i XVII wieku（十六・七世紀レンベルグの物價）*Badania*...Nr. 4, 1928; Hoszowski, S. Ceny w Lwowie w latach 1701–1914（レンベルグの物價―一七〇一年から一九一四年―）*Badania*...Nr. 13, 1934; Pelc, J. Ceny w Krakowie w latach 1369–1600（クラコーの物價―一三六九年から一六〇〇年―）*Badania*... Nr. 15, 1934; Adamczyk, W. Lublinie od XVI dokońca XVIII wiek（ルブリンの物價―一六世紀から十八世紀末―）*Badania*... Nr. 17, 1935; Pelc, J. Ceny w Gdańsku w XVI i XVII（一六・七世紀ダンチヒの物價）*Badania*... Nr. 21, 1937; Furtak, T. Ceny w Gdańsku w latach 1701–1815（ダンチヒの物價―一七〇一年から一八一五年―）*Badania*... Nr. 22, 1935; Siegel, St. Ceny w Warszawie w latach 1701–1815（ワルソーの物價―一七〇一年から一八五一年―）*Badania*... Nr. 25, 1936 がある。ほかに、一九三八年當時、ポーゼンの物價（十五世紀から十九世紀）、十六・七世紀ワルソーの物價、クラコーの物價（一七九六年から一九一四年）について研究が進められていた。特に Hoszowski の一九二八年の業績はポーランドにおける物價史研究の基礎となつた。一九五四年刊の Les prix à Lwow (XVIe–XVIIe siècles), Paris はその佛譯で、物價史研究における存在意義を今にいたるも失わない。

本稿は、これら新しい型の研究の一々について紹介を試みようとするものではない。アメリカの業績は Cole, American Research in Price History, Philadelphia 1941 に詳しい。またポーランド、オーストリア、ドイツにおける一九三八年までの成果については、Maas, W. "Zur Geschichte der Preise in Polen, Österreich und Oberdeutschland," VSWG 1938, Heft 4 が參考になる。問題は、個々の業績ではなく、むしろ、國際的比較の便宜を考えての個別研究を目差す新しい物價史において、これを果すため如何なる態度で研究が進められていたかにあつた。

二

幾度かの會議で、資料整理の方法は出來るだけ統一するよう指示

された。そして、この精神に沿つて整理の努力が拂われた。實際はどうか。

特徴的な點は、種々な地域に散在する種類の違う斷片的な記錄を避けて、同じ目的のために同一の機關によつて作成された價格の資料に限つて利用している點にあつた。しかもこの種の資料は少なくとも五十年間にわたり繼續していなければならなかつた。種類が違い出所の違う記錄から知り得る種々な價格は、たとえ名目的に同一物についての價格であつても、違つたものの價格であり得るし、また資料が違えば、當然、單位名目の示す大きさの違いや、販賣・購入の條件の相違から起る價格の開きがあるはずである。從つて、種々な地域の種々な記載から價格の比較を試みようとすることは、變化するものを基礎に置いて考えようとする態度であつた。かかる態度を、新しい物價では、比較することの出來ないものを比較する態度として排擊した。新しい物價史は、斷片的な記錄を利用しない。相互に關連のない資料から價格の記錄を集めて並べるというのではなく、そこでは、同じ目的のために同一の機關が繼續的に記載した價格の資料によつて研究を進めているのが何よりも特徴的であつた。そして、資料整理の上のこのような制約が、新しい物價史を、結局において地域的研究に追いやる結果となつたのであつた。例えばBeveridge の研究は、表題にイギリスの物價史とあつても、ブリストル海峽とハンバーを結ぶ線の東南部の諸地域に限られていた。また Posthumus のオランダ物價史は、アムステルダム取引所の資料を中心としての業績であつた。ドイツに關する Elsas の研究といい、またオーストリアに關する Pribram の研究といい、いずれもそれぞれミュンヘン、ウィーンを主としての記述であつて、決して一國の全體にわたる研究ではなかつたのである。

しかし反面、利用すべき資料をそのように限定したことは、經濟史研究のための素材を使い易い形で整理しようという當初の意圖から出發していた。同じ目的のために同一の機關によつて作成された價格の繼續的な資料だけに頼つて、斷片的な資料を排したことは、記述の客觀性を期するためにも十分な意味があつた。それは次のような事情によつた。

單位名目が示す實際の大きさは場所により相違した。しかし同一の資料で同じ單位名目の示す大きさは常に一定しており、特別な例外を除けば、その變更は資料に明記されてあるのが普通であつた。同じ市場のなかで同一の單位名目は長く使用され、殆んど變更がないのが通例であつた。從つて同じ地域の繼續的な資料によつたことは、單位名目の示す大きさの相違から起る誤謬を避け、比較の客觀性を得るために役立つたわけである。

また新しい物價史で利用すべき資料をそのように限り、同じ目的のために同一の機關が作成したものを絶えず追つていたことは、取引條件の相違から起る混亂を避けることが出來た。卸値と小賣値を、また送料・手數料を含む値段とそれらを含まない値段を、たとえ同一物についての價格であつても同列に置くことは無意味なのであり、販賣條件を無視しての發言は甚だしく事實を曲げるものといわねばならない。

同時に、支拂方法も價格に影響した。特に即金か信用拂かで賣手が要求する價格が違つて來る。特に國王は支拂が遲く、約束の不履

行も多かつたので、高い價格を要求された。從つて國王の購入簿に記載された價格を他の資料の記載と同列に出來ない。同一の機關によつて作成された同一の資料を追つたことは、こういつた點に對する顧慮からでもあつた。

また銘柄についても、同じ機關は同一目的のために通例同じ銘柄のものを購入し續けた。もし變更があれば、資料に明記されてあるのが通例であつた。從つて斷片的な資料によらないで、同じ目的のために同一の機關が作成した價格の繼續的な資料によつたことは、そういつた銘柄の違いから生ずる誤謬を避けるのに役立つた。小麥・鐵・鹽・牛肉・毛織物といつた簡單なものでも銘柄は種々あつた。そして時代の經過と共に複雜なものとなつて行つた。從つて、同じ銘柄のものの價格の推移を知るには、同じ目的のために同一の機關が作成した資料について追う以外にない。

新しい物價史研究でこのような態度が採用されたことは、慣例というものが物價史の研究において大きな意味を持つと信じたからにほかならない。新しい物價史の研究は、同一の機關で購入・販賣の條件が、支拂の方法が、單位名目の大きさが、そして購入銘柄が常に同一であるという想定の下での研究であつた。しかしかかる想定は短期間についてのみ妥當するのであろうが、長期間になると問題が起る。特に、品質は絶えず變化しており、從つて極端に長期間にわたる比較は意味がない。例えば黑死病以前の鋼鐵と現在のそれとの比較は興味があるが、何の意味もない。現在の鋼鐵は六世紀前の鋼鐵と硬度が違う。今日の小麥は中世のそれと違わないが、生活において占める比重は同一でない。從つて比較は意味がない。新しい物價史では表題に長期間にわたる研究を唱え、例えばイギリスの研究の場合十二世紀から十八世紀とあるが、これは、その期間について利用することの出來た資料があつたという意味で、十二世紀と十九世紀の直接の比較を意味するものではなかつた。遠く隔つた時代の對比というよりは或る世代から他の世代への經濟的發展に對して一つの糸口を與えようとするのが新しい物價史での主たる目的であつたのである。

三

國際的協力と、ロックフェラー財團の資金援助で各國について代表的な物價史の完成を見た。いずれも大部な研究であつた。資料整理の方法は出來るだけ統一するよう指示されていた。その基調精神については以上に概說した。全般的に研究を進めた場合に起り易い危險を避けるため、知られる如く、狹い地域について詳細な研究を積上げようとしていた。また記述の客觀性を期するため、極端に長い時期についての比較ではなく、限られた時期の動きに關心を寄せていた。從つて、結局において、極端な個別研究に終つていた。しかし、歷史研究のすべてにいわれる如く、全體的把握に達するための個別研究としての意味は十分に持つていた。

と同時に、それは、既に明らかな如く、價格の記載を最も接近し易い形で整理した資料集を目差していた。經濟史家は、それらを得て價格の資料に親近感を抱くようになつた。そして好んで使用した。その結果、通說の修正も一、二に止まらない。最近にも、フランス革命における社會の諸階層の動向を物價と賃銀の動きから把え

ようとしており、經濟史の研究において新しい物價史が占める位置は益々增大して來ている。

しかし他面、その基底においてこれら物價史家が物價の動きの原因を貴金屬の供給の變化に求めていたことは、一部の經濟史家の批判するところとなつた。例えばAbel, W., Postan, M. M. で、彼等は、もし貴金屬の供給における變化が何よりも信頼すべきものとすれば、價格の上昇・下落はすべてのものについて同樣であるだろう、ところが中世末については農產物の上昇・下落が工業生產物の上昇・下落よりも早く且つ激しかつたことから、この事實は、人口における變化によつて以外に滿足に說明することが出來ないと考えた。彼等のこの論理は第九回國際歷史學會での Postan の發言のなかで巧妙に展開されていた。外的要因によつてでなく、經濟の內部的發展から物價の動きを說明しようとする立場で、完成を今後にまつべき重要な提言であつた。

月刊 三色旗 一月號

〔隨想〕
青年の頭……板倉卓造
雄辯……高橋誠一郎
偶感……西本辰之助
言葉づかい……潮田江次
國際政局の背景……內山正熊
ハワイたより……野村兼太郎
フランスの大學生……佐藤朔
「アメリカハーバード大學、哲學」……澤田允茂
新中國の表情……村松暎
西アフリカ紀行……矢內原勝
音樂の本質に就いて……野村光一
——音樂講座(一)——
—海外の旅と生活から—

◇定價一部三〇圓・一年三六〇圓・書店へ直接御申込下さい。

東京都高輪局
三田豐岡町八
慶應通信
(振替東京一五五四九七番)

書評及び紹介

D・ハンフレイ著『アメリカの輸入』

Don D. Humphrey, American Imports, 1955. New York. (A Study jointly sponsored by the Twentieth Century Fund and the National Planning Association with a policy statement by the Association's Committee on International Policy.)

現在の國際經濟の不安定乃至不均衡の要因の一つは、米國の輸入が相對的に少なすぎることである。これは既に第一次大戰後問題になつたところであるが、更に今次大戰後ではドル不足に現れ一層重要な問題として世界の關心事となつた。本書はこのように注目をあびている米國の輸入を歷史的に分析し、その長期減少傾向を指摘すると共に、その輸入政策を論評するものである。殊に興味のあるのは輸入を經濟成長と景氣變動から考察するばかりでなく、輸入政策の作用をも統計的に檢討していること、またこのハンフレイ敎授の結論からスポンサーたる National Planning Association の政策委員達が米國の輸入政策に署名入のステーツメントを收めていることである。

現在の米國の國際的地位は Non-Soviet World を强化する手段を提供するところにあるが、この機能を果すには對外經濟政策が適切であることを要する (pp. 494-496)。しかるに米國の輸入が少なすぎることは Non-Soviet World の諸國に非常に困難を與えている。ドル不足という現象も結局はここに歸せられるわけで、これをまずいかに調整するかが充分檢討されねばならない。しかしそれには米國の輸入の歷史的分析が必要である。

輸入の長期的傾向を考える場合には、その國の經濟成長と景氣循環、更に貿易政策の變化の三つの條件との關係を求めなくてはならぬ。今、米國の經濟成長と輸入についてみるならば次のような諸點が指摘され得るであろう (p. 17)。

第一は南北戰爭から一八九〇年代までと、一九三〇年代まで輸入と國內品產出高の成長がペースを保つていたが、第十九世紀後半及び一九三七年以降になると、國內品のそれがはるかに輸入のそれをこえている。換言すれば米國の輸入價額は勿論年々增加しているとしても、國內產出高と比較するとその成長が小となりつつある。これは今後益々顯著であろう。第二は輸入構成の變化のうち、粗原料の割合が第一次大戰以後減少し、次第にその相對的重要度を減じつつあることである。これは天然輸入原料より化學原料生產への轉換を反映するものとして注目に値いする。第三は輸入品の高度集中化の傾向である。既に一九二九年より一九四九年には八品目のみが成長をみせており (pp. 33-34)、今後は一層これに集中され、また將來五品目內外にまで集中化する傾向をもつている。從つて、前述の國內生產と比較しての輸入の成長率の減少はこのような輸入品の品種のシフトに大きく依存しているというべく、これは世界的な長期の價額の趨勢の反面、米國の技術上の進步によると考えられる (pp. 36—38)。